戦国前期東国の城郭に関する一考察
—深大寺城を中心に—

竹　井　英　文

はじめに

近年の城郭研究において，「杉山城問題」と呼ばれる論争が起きていることは周知の通りだろう。「杉山城問題」とは，「中世城郭の教科書」とも云われる埼玉県嵐山町の杉山城の縄張年代をめぐって，縄張論と考古学・文献史学との間で約半世紀ものズレが生じたことから始まった論争である(1)。これにより，縄張による城郭の編年という城郭研究の基本的な方法論や，戦国大名独自の築城技術とその伝播を想定し，縄張の発達を戦国大名権力に結び付けて捉える「戦国大名系城郭論」などの再検討が要請されるに至っている(2)。また，縄張論，考古学，文献史学それぞれの方法論の有効性と限界性とは何か，といった根本的な問題も表面化している。

中でも重要なのは，従来の研究では軽視されがちであった戦国時代前半の城郭への注目が高まったことである。これらは，築城技術が未発達で単純な縄張を持つものと想定され，文献史料も少ないことから，わずかな研究を除き，正面から検討されることはこれまでほとんどなかったと言っても過言ではない(3)。しかし，「杉山城問題」により，その見直しと再評価が喫緊の課題となっているのが現状である。

筆者は，文献史学を専門とするものだが，このような状況を打開し新たな学際的研究を行うために文献史学が行うべきことは，まずは個々の城郭の歴史的位置を文献から明確にすることであると考えている。特に戦国前期の城郭については，文献史料の少なさや，研究者の関心の低さなどにより，十分検討されているとは言い難い状況である。

そこで，本稿では，東国の戦国前期城郭の代表例である東京都調布市の深大寺城について，文献史学の観点から検討を加えることにしたい。深大寺城につ

いては，従来の研究では『河越記』など江戸期の軍記物・編纂物や考古学の成果からの評価が主であったが，実は文書史料が2点存在していることは，あまり知られていない。本稿では，その2点の文書を手がかりとして，深大寺城の歴史を可能な限り検討するものである。

1．深大寺城の研究史

深大寺城の研究史については，既に『深大寺城跡』[4]が詳細にまとめているが，それを参考にしつつ，本稿の問題関心に沿って再度整理をしてみたい。

深大寺城は，東京都内に所在することもあって，古くから研究対象とされてきた。『深大寺城跡』によると，近代歴史学において最初に検討を加えた研究として，1927年の鳥羽正雄氏の「深大寺城址」[5]を挙げており，最新の研究である2007年の『深大寺城跡』まで80年間の研究史がある。その中でも，深大寺城の歴史的位置を考えるうえで，重要な論拠となっているのが，軍記物の記述と発掘調査の成果である。まずは，この点を丁寧に整理しておきたい。

従来の研究では，以下のような軍記物類が，深大寺城の存在を証明する唯一の文献史料とされ，これらによって基本的な歴史的位置を与えられていた。

【史料1】[6]

深大寺とかやいへるふるき郭を再興し，相州に向てこれをかこむ。

【史料2】[7]

いつよりか例ならずと心ちそこなひて，天文六年卯月下旬世をはやくさりて，嫡男五郎朝定，生年十三歳にして家をつぎ給ひぬ。ていれば，七々日の服忌さへ経ずして，道をあらためて兵をおこし，深大寺と云古城をさいこうし，氏綱へ向て弓矢の企もつぱら也。

【史料3】[8]

同年（天文六年…筆者注）七月，武州川越城主上杉朝定朝興男，于時十三才，父朝興カ遺言ニ任セ，仏事等ヲサシ置テ同国神太寺ノ古キ要害を取立，氏綱ヲ退治スヘキ企ヲス，

これらはいずれも江戸時代になって編纂されたものだが，その叙述には一定の信憑性があり，史料としての有用性を持つものである。ここから，深大寺城は，天文六年（一五三七）に扇谷上杉朝定により対北条氏目的で築城されたこ

と，それ以前に先行する城郭である「ふるき郭」「古城」「古キ要害」（以下，「ふるき郭」に統一する）が存在していたこと，の二点が指摘されることとなった。江戸時代の地誌である『新編武蔵風土記稿』では，城主を難波田氏としているが，この点については上記文献には記されておらず，現在ではその可能性は否定的となっている。

このように，文献史料が上記のみであるとされてきたため，深大寺城の本格的な研究は，発掘調査によって行われることとなった。発掘調査は，昭和三十三年から三十七年にかけて第一・第二郭において断続的に行われ（昭和の調査とする），さらに平成七年，平成十七年（平成の調査とする）にも行われた。これら一連の調査の結果が，現在の研究の到達点であるため，その要点を整理しておこう。

まずは縄張構造について，昭和の調査により，それまで存在が不明だった第三郭が確認され，深大寺城が主に三つの郭により構成されていたことが明らかとなった。これにより，深大寺城の縄張構造が具体的に把握され，縄張研究が可能となった。

次に，城内の建造物について，昭和の調査により，第二郭に九棟，第一郭に四棟の建物跡が検出された。第二郭の建物は長屋のようなもので，第一郭の建物は第二郭と比べて簡素なものだったことも判明している。平成の調査で建物跡は再び確認され，第一郭の四棟の建物は二棟ずつ遺構が重複しているため，四棟が同時期に存在していたとは考えられず，異なる時期に二棟ずつ存在していたこと，逆に第二郭の九棟は遺構が重複しないため，同時期に存在していた可能性が高いことが指摘されている。いずれにせよ，第一郭と第二郭は，その性格が異なることが想定されるに至ったのである。また，平成十七年に行われた最新の調査では，新たに第三郭外堀西側にある虎口部分が方形に突出するように造られていることも確認された。報告書を見る限りでは十分形状を把握できないが，馬出，あるいは枡形の可能性もあろうか。ただし，第三郭は遺構や遺物が検出されておらず，どの程度曲輪として機能していたのかは不明という。

次に，遺構について，『河越記』などの軍記物・編纂物に見える「ふるき郭」のものと思われる堀（第一期の堀とする）が，第二郭から検出された。堀はクランクを伴っていて，現存するあまり折れが認められない堀と比べて，横矢が掛かる構造となっていたようである。その形状は，上幅 5.15m，底幅 2.4m，

深さ2.4mの箱堀で，第二期の堀構築時に一気に上部まで埋められたことも確認されている。この堀も，平成の調査で再確認され，一部は第二期の堀に再利用されたこと，検出された建物跡と重ならないため，建物跡は必ずしも第二期とは限らず第一期の頃の可能性もあること，などが指摘されている。こうして，この堀は「ふるき郭」のものと位置付けられ，文献史学と考古学の成果が合致した事例として，注目を受けることになった。なお，築造時期については，長尾景春の乱や長享の乱時の可能性が指摘されるくらいで，年代は不明とされている(9)。

また，平成の調査では第一・第二郭の堀の再調査も行われ，第一郭の堀は上幅7m前後，底幅1m前後，深さ4.5m前後の薬研堀で，第二郭の堀は上幅9m，底幅6m前後，深さ3.5m前後の箱堀であることが確認された。第一期の堀と規模が異なっている点は興味深い。

最後に，遺物の問題である。遺物は，昭和の調査で発掘されたものが大半であり，平成の調査では昭和の調査の確認ということもあって遺物は極めて少ないという。よって，昭和の調査で発掘された遺物を主な分析対象としている。

それによると，青磁椀や瀬戸・美濃系陶磁器，常滑系甕，かわらけなどが出土しており，時期的には十三世紀から十六世紀前半までのものが多いという。特にかわらけは，上杉氏関連城館跡でよく出土するものと同種のもので，十五世紀末から十六世紀前半のものと推定されている。また，大窯4段階の稜皿と擂鉢も若干出土しており，これらは十六世紀後半のものとされている。しかし，その点数はごく少ないことから，考古学的には深大寺城の使用期間は十六世紀前半までとされ，これが現在まで通説となっている。

深大寺城の年代については，縄張研究の側からも比定されている。『図説中世城郭事典』(10)によると，遺物が十六世紀前半までで，縄張が他の北条氏関係城郭と比較して未発達であることを理由に，考古学と同様十六世紀前半の扇谷上杉氏段階までと推定している。

以上，先行研究の要点を整理したが，その中でもやはり重要なのは，第一期の堀が発見されたことにより，深大寺城が第一期と第二期に分かれ，それぞれ異なる縄張だったことが想定されること，文献に見える「ふるき郭」の存在が実証されたことである。これは，深大寺城の年代を考えるうえで重要な視点を提供することは疑いない。この点を踏まえたうえで，次に深大寺城関係の二点

の文書を読み解いていくことにより，深大寺城がいつ，どのような歴史的背景のもとに存在した城郭だったのかを明らかにしたい。

2．長享の乱と深大寺城

本章では，次の史料を中心に検討する。

【史料４】[11]

一昨日十三，於小沢河原合戦勝利，敵討捕候，心地好候，深大寺祗候面々動雖不始事候，推察前候，小早河同心走廻被成尤候，一両人所江御感事可相越候，扨又一両日ニ鉢形近所へ可出陣候，隙明候者，急度可罷越候，謹言，

九月十五日　　定正（花押）

篠窪三郎左衛門尉殿

この史料は，扇谷上杉定正が，家臣の篠窪氏に対して出した書状で，『北区史』にて既に収録済みのものである。篠窪氏は，相模国篠窪郷（現在の神奈川県大井町篠窪）を本拠とする領主で，元々は二階堂氏を名乗っていた。これによると，年未詳九月十三日の小沢河原合戦で，深大寺の軍勢や小早川氏の同心が活躍したことに定正が満足の意を表し，その意を彼らに伝えることを篠窪氏に命じている。さらに数日中に鉢形近辺へ出陣する予定であることも伝え，定正のもとへの参陣を命じていることがわかる。

【史料４】で何よりも注目されるのは，「深大寺」という地名が登場していることである。これは，同じく登場する「小沢河原」が，北条氏康と扇谷上杉朝定が戦った，現在の川崎市多摩区・東京都稲城市の小沢原のことを指すものと考えられることから，小沢原から多摩川を隔てた対岸に位置する，現在の東京都調布市の深大寺と見て間違いない。また，「雖不始事候」とあるように，以前から深大寺に扇谷上杉氏に仕える軍勢がいて活躍していたことも窺われる。そうであるからには，これ以前から，おそらく扇谷上杉氏の城郭として深大寺城が存在し，城兵が詰めていたと考えるのが自然であろう。そのため，【史料４】は深大寺城の歴史を明らかにするうえで，極めて重要な史料ということができよう。しかし，『深大寺城跡』では全く触れられていないのである。

【史料４】を検討するに際して，何よりも必要なことは，年代比定である。この点，『北区史』では長享の乱時のものと推定しており，本稿でもこれを手

がかりとして可能な限りの年代比定を行いたい[12]。その際，重要なポイントは，登場人物の生没年と，扇谷上杉定正が九月十九日前後に，現在の埼玉県大里郡寄居町の鉢形城近辺にいるという事実である。

まず，登場人物であるが，篠窪氏の生没年は不明なものの，扇谷上杉定正は文明三年（一四七一）に家督を継ぎ，明応三年（一四九四）に没していることがわかっているので，その間のものであることは疑いない。この間には，長尾景春の乱と長享の乱，明応年間の両上杉氏の対立という，東国全体を舞台とした大きな戦乱が続発している。長尾景春の乱は，文明八年（一四七六）六月に，山内上杉氏の家宰の地位をめぐって長尾景春が反乱を起こしたものである。景春は，鉢形城を拠点としていたが，文明八年九月段階では未だ戦乱は本格的となっておらず，定正の動向も窺えないし，この頃各地を転戦していたのは家宰の太田道灌であった。また，翌文明九年七月十八日には太田道灌が鉢形城を攻略し，以後は山内上杉顕定の居城となったようであることからも，本史料を長尾景春の乱時の史料と考えることは難しいものと思われる。よって，次に勃発した長享の乱時，あるいは明応三年の両上杉氏の抗争時の可能性が高い。

では，長享の乱時の可能性を検討してみたい。ポイントは，定正が鉢形近辺にいることだが，これはおそらく山内上杉顕定の居城である鉢形城の攻撃を狙って起こした軍事行動だろう。これを念頭に置くと，さらに二つの年代が考えられる。

一つは，長享二年（一四八八）である。太田道灌が謀殺された直後の長享元年十一月に勃発した長享の乱は，翌年に激化し，「関東三戦」と呼ばれた二月三日の実蒔原合戦，六月十八日の菅谷原合戦，十一月十五日の高見原合戦と立て続けに大合戦が繰り広げられた。このように，長享二年は相模から武蔵にかけての広範囲で，山内上杉方と扇谷上杉方が衝突していること，定正が同年六月から十一月まで比企郡周辺にいて，鉢形城を攻撃しようとしていたことから，【史料4】は長享二年九月，つまりは菅谷原合戦が終了し，高見原合戦が起きる直前の史料という可能性が指摘できる。

もう一つは，延徳元年と二年（一四八九・九〇）の可能性である。これに関しては，次の関連史料がある。

【史料5】[13]

就箕田江着陣示預候，篠崎江被進御陣，如斯預御書候間，此渡ニ懸橋為御

迎，村岡口へ可令出陣候，其方御用心被仰付，此口へ御家風一騎も被立候者，可然候，案文写進之候，可被御披見候，恐々謹言，

八月廿七日　　修理大夫定正

謹上　治部大輔殿

【史料6】[40]

昨日書状，只今申刻於平原陣披見，去十六以来，連日被相動候哉，尤肝要候，仍定正陣所箕田へ差懸候処，堀(堀)須江被馳参候，荒川端不自由上切所候間，諸軍揺難有之候間，自成田江打廻，為可懸一戦平原江移陣候間，明日可為仰候，此砌其口揺専一候，千葉介自胤着陣候間，兵議等弥可心安候，早々出陣待入候，恐々謹言，

十月廿日　　顕定

太田源六殿

いずれも，『北区史』に既に収録済みの史料で，長享の乱時のものと推定されている。この二つを比べてみると，定正と顕定が対立していること，定正が箕田（埼玉県鴻巣市）から村岡口（埼玉県熊谷市）へ進み，鉢形城方面へと向かおうとしていたと思われること，定正が箕田（埼玉県鴻巣市）に在陣していることが共通していること，日付も近いことから，長享の乱時のもので，しかも同年のものと考えるのが自然だろう。

そうなると，長享二年から和睦が成立した延徳二年十二月までと，戦争が再開された明応三年七月から定正が没する同年十月五日の可能性が出てくるが，【史料6】では十月廿日時点で定正が箕田に在陣していることが書かれているので，明応三年の可能性は消える。また，【史料6】によると，宛所である太田資康は，箕田の至近距離にある屈須（埼玉県鴻巣市）に在陣していることがわかる。資康は，長享二年六月の菅谷原合戦に参加しており，菅谷原にある平沢寺に陣所を構え，九月末まで同地に在陣しているので，長享二年の可能性も消える。よって，【史料5・6】ともに延徳元年から二年の可能性が高い。

問題は，【史料4】と【史料5・6】との関係だが，日付が近いこと，いずれも鉢形城へと向かおうとしていることから，【史料4】も【史料5・6】と同年である可能性が出てくる。そうすると，延徳元年九月か同二年九月のものとなり，この頃も両上杉氏間の戦争は各地で継続していて，定正が鉢形城を狙う状況だったことが指摘できる。

そして，最後に明応三年（一四九四）の可能性である。これは，【史料4】と【史料5・6】が無関係であることが前提である。明応三年七月，一時的に和睦していた両上杉氏の戦争が再開され，山内上杉方が扇谷上杉方の関戸要害（東京都多摩市）を八月十五日に，玉縄要害（神奈川県鎌倉市）を九月十九日に攻略している[19]。これを受けて，顕定はさらに松山城（埼玉県吉見町）の攻略を狙うが，定正も高見原まで進軍し，定正からの支援要請を受けた北条早雲も，九月二十三日に山内上杉方である三浦氏の三崎城を攻略，同月二十八日には鉢形城近辺の塚田に在陣している。その直後の十月五日に，荒川を渡河する際に定正は落馬して頓死したとされている。このように，明応三年八月には，深大寺城や小沢河原に程近い関戸要害で合戦が行われていることから，【史料4】にみえる九月十三日の小沢河原合戦も，これら一連の戦争の一環として捉えることも可能である。また，九月頃に定正が鉢形城方面へと進軍していることも事実である。よって，【史料4】は明応三年九月の可能性も指摘できる。

以上，できる限りの年代比定を行ってきた。和睦中とされている延徳二年十二月から明応三年七月までの両者の動向が史料的な制約から不明なのが問題だが，現在まで判明している政治情勢を前提とするならば，【史料4】は長享二年から延徳二年のどれかと，明応三年の可能性があること，両上杉氏の戦争に関連する史料であることが指摘できることを強調したい。

つまり，深大寺城は，山内上杉氏との対立という状況のもとに，一四九〇年前後には扇谷上杉氏の城郭として築城され存在していたと考えられる。そして，これこそが従来から指摘されてきた「ふるき郭」そのものといえよう。よって，深大寺城の第一期は，一四九〇年前後と比定できる。これは，深大寺城の歴史を考えるうえで，今後重要な事実となるだろう。その後の深大寺城の様子は不明であるが，「ふるき郭」を「再興」したという従来の説に従えば，程なく廃城となったと考えられる。そして，天文六年，深大寺城は再び歴史の表舞台に登場するのである。

3．深大寺城の「再興」

本章で検討する史料は，次の史料である。

【史料７】[16]

従矢野方之一書具被披見候，仍神奈川代官夫事，申届候処，越前被官沼上与申者相押候由候間，則越前ニ申付候，彼返事ニハ先度矢野方へ渡候時，在所之者并被官等迄違乱有間敷候由申付候，雖然召仕候者未断之輩不及是非候間，急度矢野方へ可相渡候由，返事ニ申候，此上之儀者代官夫事不及沙汰候，早々申付，可被召遣候由可被仰候，但於違乱之輩者，於彼在所可被加生涯候，此由具矢野方へ可被仰届候，就中倩夫一人之事，是者主知行与申，殊印判遣候上ハ，兎ニ角ニ別儀有間敷候条，堅可被申付候由存候，将又氏綱かたへ罷出候楯付馬之儀，両人是をハ時分を計候て申調，可進候由可被仰候，再三申候共，彼書中ニ過間敷候間，従其方矢野方へ急度可被仰届候，尚以違乱之輩，在所之者ニても可被為生涯候，隋而河越衆神太寺へ陣を寄候由，此方へも申来候，殊外無人数之由申候，乍去具不見届候間如何，自其方人を被遣，懇聞届，其上可承候，猶期面候，恐々謹言，

三沢九郎（彦）

七月三日（天文六年）　　為昌判

『深大寺城跡』は，この史料の存在にも触れていないが，実は『北区史』や黒田基樹氏[17]，『東京都の地名』[18]などでは，深大寺城関連の史料として既に取り上げられている。差出人は，北条氏康の弟である北条彦九郎為昌である。宛所は削除されているが，この史料の内容の最終的な受給者は，矢野氏であることから，為昌と矢野氏との間を取り持つ役割をしていた為昌の家臣であることがわかる。

内容としては，武蔵国神奈川地域の支配に関することと，河越衆＝扇谷上杉氏の軍勢が「神太寺」＝深大寺へ陣を寄せたことの二点である。年代は，扇谷上杉氏の軍勢が深大寺に在陣していること，七月三日という日付から，【史料１～３】と同様，天文六年（一五三七）に比定できる。つまり，深大寺城が扇谷上杉氏によって天文六年七月に再興されたことは，軍記物だけでなく文書史料からも確認できるのである。

では，【史料７】は，いかなる歴史的背景の中で登場したものなのだろうか。当該期の政治史を整理した黒田基樹氏の研究を再度参考にして，さらに深く掘り下げていきたい。

北条氏による武蔵進出が本格化するのは，大永年間からである。大永四年

(一五二四)，北条氏綱が扇谷上杉朝興から江戸城を奪取し，南武蔵支配の拠点を確保したことにより，両者の対立は激化する。その中でも，激戦地となった地域の一つが，武蔵国荏原郡・多東郡・橘樹郡で，特に多摩川を境とした地域で激戦が繰り広げられた。

北条氏が江戸城を入手した後も，扇谷上杉氏の勢力は容易には後退しなかった。大永六年九月九日には，両上杉氏が北条方の拠点の一つである武蔵国小沢城を攻略し，さらに同年十一月には玉縄城をも攻撃している[19]。享禄三年（一五三〇）正月にも，同様に扇谷上杉氏が北条方の世田谷城と小沢城を攻略し，江戸城をも攻撃して根小屋を焼き討ちしている[20]。同年六月十五日には，武蔵府中に陣取った扇谷上杉朝興と，初陣の北条氏康が激突した小沢原の戦いが行われ，北条方が勝利を収めている[21]。そして，【史料7】に見られるように，天文六年に深大寺城が「再興」されるに至る。

このように見てみると，深大寺城周辺地域は，少なくとも【史料4】から【史料7】までの長期間にわたって，各勢力間がぶつかり合う戦場となっていたことがよく理解できるだろう。ここで注目されるのは，【史料4】に登場する小沢河原合戦と，大永六年と享禄三年に登場する小沢城及び小沢原の戦いである。小沢城は，古くは南北朝時代にその存在が確認されており，戦国期になると北条方の城郭として再び姿を現している[22]。

つまり，深大寺城と小沢城は，同一文献で同時に登場することは確認されていないが，同時期に存在していたことは確実であり，非常に緊密な関係を有していたことがわかる。度々行われた小沢原合戦は，まさに深大寺城側の勢力と小沢城側の勢力が激突するにふさわしい空間として存在していたのである。よって，深大寺城は，【史料4】以来，基本的には常に多摩川南岸の小沢原や小沢城周辺を意識して築城され活用されてきたものと捉えることができよう。

以上のことを踏まえると，天文六年の深大寺城「再興」というものの性質はいかなるものなのかが問題になる。「ふるき郭」を「再興」したというからには，しばらくの期間使用されていなかった古城を再び城郭化したことを意味しよう。しかし，状況的には，上述したように大永六年や享禄三年の小沢城攻防戦や小沢原の戦いの時に，既に扇谷上杉氏により活用されていた可能性も十分に考えられる。一方で，深大寺城の名がはっきりと登場するのは天文六年のみであり，享禄三年小沢原の戦いでも，扇谷上杉軍は深大寺城ではなく武蔵府中

に在陣しているのである。

このあたりの意味をどのように考えるかは難しいところだが，大永年間から天文三年までの合戦は，相模・武蔵の広範囲にわたっていたが，天文三年以降，北条氏が徐々に扇谷上杉氏を圧倒するようになり，それ以後は扇谷上杉氏による相模侵攻を許していないことは注目される。つまり，それまで北条氏と扇谷上杉氏の戦場の一つであった深大寺城周辺地域が，天文六年段階では明確に両者の「境目」と意識されるようになったからこそ，深大寺城が改めて扇谷上杉氏の「境目」の城として象徴的に取り立てられたのではないか。

これに関連して，北条氏の南武蔵の領域支配が進んだことが指摘できる。それは，【史料７】の北条為昌書状に何故深大寺城が登場するのかという問題とも関連する。黒田基樹氏によると，為昌の本拠は玉縄城だが，その支配領域は相模国東・三浦両郡と，武蔵国橘樹・都筑・久良岐三郡にわたる広大な領域だったことが明らかにされている[23]。特に，【史料７】前半部に見られる神奈川地域の支配など，南武蔵に関しては天文六年段階でその領域支配が進んだと思われ，多摩川をその境としていたと考えられている。為昌のもとに扇谷上杉氏が深大寺城に在陣した一報が入ってきた背景として，こうした為昌による南武蔵領域支配の進展があったと考えることができるだろう。よって，深大寺城も，直接的には為昌に対する「境目」の城として取り立てられたと評価できる。【史料７】の直後に川越城を落とした北条氏が，為昌を川越城将としたのも，為昌の支配領域が扇谷上杉氏との「境目」に位置し，常に扇谷上杉氏と対峙していたという背景があったからなのではなかろうか。

おわりに

本稿では，先行研究では不十分であった，深大寺城関連の文書史料の紹介と読解を行い，深大寺城を文献史学の観点から歴史的に位置付けようと試みた。

まず，従来あまり注目されてこなかった【史料４】について，検討を加えた。その結果，年代については，長享二年（一四八八）から延徳二年（一四九〇）と，明応三年（一四九四）の二つの可能性を指摘したが，確定はできなかった。しかし，いずれにせよ十五世紀末（一四九〇年前後）に比定されることは確実であり，両上杉氏の戦争に関連する史料であることがわかった。そして，「深

大寺」はおそらく深大寺城のことを指し，これ以前から扇谷上杉氏の城として存在していた可能性が高く，「ふるき郭」や発掘調査で発見された第一期の堀は，この段階のものと評価した。

次に，【史料7】から，文書史料からも天文六年（一五三七）に扇谷上杉氏の城として深大寺城が存在していたことを確認した。さらにその背景を探るため，大永から天文六年までの深大寺城周辺地域の動向を検討した。大永年間頃から北条氏と扇谷上杉氏の対立は激化し，大永六年と享禄三年には，深大寺城近くの小沢城や小沢原で合戦が行われており，深大寺城はこの頃にも扇谷上杉氏の城として活用されていた可能性を指摘した。しかし，明確に文献に深大寺城の名が現れるのは，【史料7】の天文六年段階である。その背景には，北条氏の南武蔵領域支配が進展したことにより，深大寺城周辺地域が明確に両者の「境目」となったことが考えられ，これを受けて，扇谷上杉氏が「再興」したものと評価した。

以上のことから，深大寺城は十五世紀末から十六世紀前半の戦国時代前半に主要な歴史的役割を果たした城郭だったことが明らかになった。特に，文献史学の観点からも，深大寺城は二つの時期に存在していることが確認され，従来指摘されてきた「ふるき郭」と，発掘調査により発見された第一期の堀の年代を比定できたことは，大きな成果といえよう。

これを踏まえて，深大寺城の縄張構造を評価するならば，次のようになろうか。十五世紀末に造られた第一期の堀は，第一章で検討したように現存する堀とは異なり，明確な折れを伴うが，小規模なものだった。これに対して，現存遺構の時期と思われる天文六年段階では，明確な折れが見られない堀へと造りかえられたが，大規模化している。これは，十五世紀末段階では，小規模ながらも折れを伴うことにより防御性を高くしていたが，天文六年段階では折れよりも堀の大規模化を優先的に行った結果とは考えられないだろうか。その背景には，深大寺城をめぐる戦争の質的変化，つまり軍勢の規模や使用武器の変化などが想定されよう。こうした点を論じるには，まだ基礎的なデータが不足しているため，想定にとどまってしまうが，今後の城郭研究は，堀や土塁の規模というものも考慮に入れて行うべきと考える。

また，深大寺城を考察するうえで，避けて通れないのが，多摩川の対岸に存在する小沢城である。この城についての研究はほとんど見られないが，南北朝

時代以来の要衝の地で，戦国時代前半には麓の小沢原で繰り返し合戦が行われており，深大寺城とも関係の深い城であることは明らかである。今後は，深大寺城単体の研究も引き続き進めると同時に，小沢城なども含めた一定の戦略空間の中に深大寺城を位置付ける作業も必要になってこよう。

戦国時代前半の城郭研究は，未だ緒に付いたばかりであり，問題は山積している。今後も文献史料を丁寧に読み解いていくことにより，各城郭の歴史的位置を明らかにする作業を続けていきたい。

---

(1) 藤木久志監修・埼玉県立歴史資料館編『戦国の城』（高志書院，二〇〇五年）に，縄張論・考古学双方の見解が示されている。文献史学からの検討としては，拙稿「戦国前期東国の戦争と城郭一「杉山城問題」に寄せて一」（『千葉史学』第五一号，二〇〇七年），齋藤慎一「戦国大名北条家と城館」（浅野晴樹・齋藤慎一編『中世東国の世界三　戦国大名北条氏』高志書院，二〇〇八年）を参照。

(2) 戦国大名系城郭論批判としては，齋藤慎一「戦国大名城館論覚書」（萩原三雄・小野正敏編『戦国時代の考古学』高志書院，二〇〇三年），前掲注1齋藤論文を参照。

(3) 戦国前期の城郭に関する研究としては，西国では山上雅弘「戦国時代の山城一西日本を中心とする十五世紀後半～十六世紀前半の山城について」（村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社，一九九〇年），同「戦国時代前半の中世城郭の構造と変遷」（村田修三編『新視点中世城郭研究論集』新人物往来社，二〇〇二年）がある。東国では，松岡進「戦国初期東国における陣と城館」（『戦国史研究』第五〇号，二〇〇五年），峰岸純夫「享徳の乱における城郭と陣所」（千葉城郭研究会編『城郭と中世の東国』高志書院，二〇〇五年），前掲注1拙稿・齋藤論文などにより，研究が徐々に活発化している。また，最近では帝京大学山梨文化財研究所主催「戦国の城と年代観一縄張研究と考古学の方法論一」（二〇〇八年）や，城館史料学会主催「縄張りからみた戦国前期の城」（二〇〇九年）などのシンポジウムも開催され，東西問わずに注目されてきている。

(4) 調布市教育委員会，二〇〇七年。以後，本稿では『深大寺城跡』とする。

(5) 一高史談会編『東京近郊史蹟案内』（古今書院，一九二七年）。

(6) 「河越記」（『北区史』資料編古代中世二，第四編二四号）。

(7) 「北条五代記」七　北条氏綱と上杉朝定合戦の事　第二期ノ二（萩原龍夫校注『北条史料集』人物往来社，二六五頁）。

(8) 「鎌倉九代後記」天文六年七月条（『新編埼玉県史』資料編八，第Ⅰ編二三号）。

(9) 「深大寺城」（『東京都の中世城館　主要城館編』東京都教育委員会，二〇〇六年）。

(10) 「深大寺城」（村田修三編『図説中世城郭事典』第一巻，新人物往来社，一九八七年）。

(11) 「上杉定正書状写」（『北区史』資料編古代中世一，二四二号，加賀国古文書七）。なお，田島光男「足利尊氏・成氏・義明・上杉定正・朝良文書と上杉朝良のもう一つの花押」（『神奈川県立公文書館紀要』第四号，二〇〇二年）に，原本（あるいは良質の写し）と思われる青木文書の写真が掲載されており，本稿ではこの写真をもとに『北区史』の翻刻の誤りを正した。

(12) 当該期の東国の政治情勢については，黒田基樹『扇谷上杉氏と太田道灌』（岩田書院，二〇〇四年）に詳しい。本稿の政治情勢の叙述はこれに大きく拠っている。

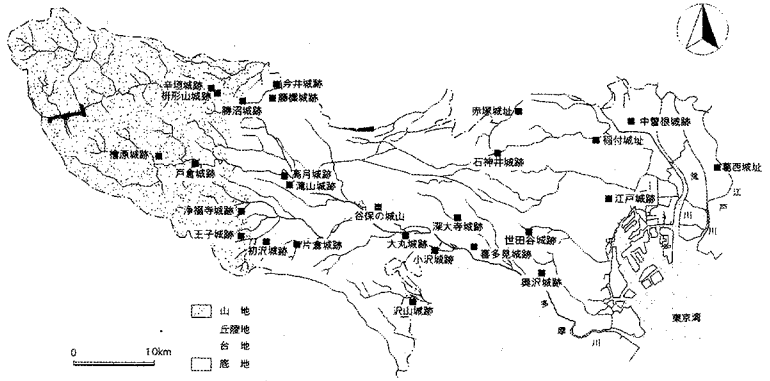
(13) 「上杉定正書状写」（『北区史』資料編古代中世一，二四一号，竹内文平氏所蔵文書）。

(14) 「上杉定正書状写」（『北区史』資料編古代中世一，二四八号，古簡雑纂六）。

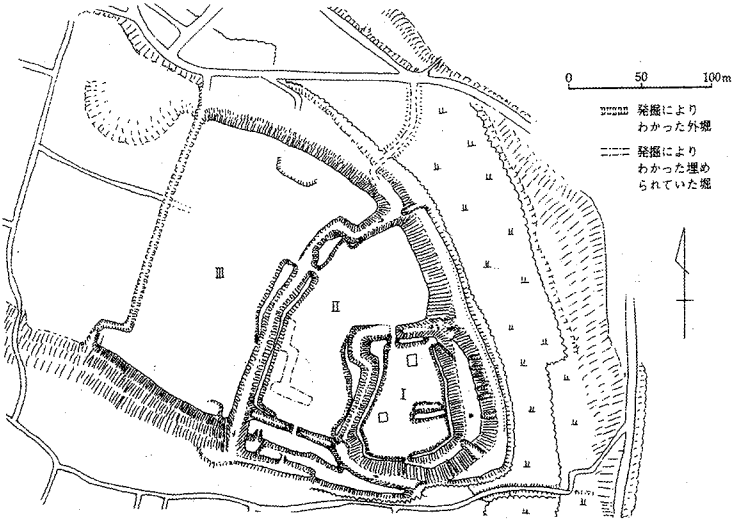
(15) 「石川忠総留書」明応三年条（『北区史』資料編古代中世二，第三編六三号）。

(16) 「北条為昌書状写」（『北区史』資料編古代中世一，三二八号，紀伊国古文書藩中古文書十二）。

(17)　前掲注(12)黒田著書。
(18)　「深大寺城跡」(『東京都の地名』日本地名歴史大系十三，平凡社，二〇〇二年)。
(19)　「本朝通鑑」大永六年九月九日条（『北区史』資料編古代中世二，第三編六六号)。
(20)　「石川忠総留書」享禄三年条（『北区史』資料編古代中世二，第三編六三号)。
(21)　「北条記」十八　府中軍之事（萩原龍夫校注『北条史料集』人物往来社，六二頁)。
(22)　「小沢城」(『日本城郭大系』第六巻，新人物往来社，一九八〇年)。
(23)　黒田基樹「北条為昌の支配領域に関する考察」(同『戦国大名北条氏の領国支配』岩田書院，一九九五年)。



都内主要城館位置図（縮尺１：600,000）
注４『深大寺城跡』より



深大寺城復元図(発掘調査時の実測図と昭和49年調査の本田昇氏の図を参考にした)
注10『図説中世城郭事典』より